

## 有機栽培あゆみの会 公開確認会 (2015年5月14日) 監査報告

パルシステム生活協同組合連合会新農業委員会

パルシステム茨城は5月14日(木)、茨城県にある産直産地、有機栽培あゆみの会の「チンゲン菜」を対象に公開確認会を開催しました。土づくりと栽培技術を確認しました。

### ■生産者と消費者 59 名が参加

「有機栽培あゆみの会公開確認会」は、茨城県行方市の「かどや」を会場に、パルシステム茨城の主催で開催されました。当日は天候にも恵まれ、会員生協や関東近郊の産直産地など、総勢 59 名が参加しました。

開会に際しパルシステム茨城小泉智恵子理事長は「今回あゆみの会の現場を見ていただき、話を聞いて確認し、さらに深い信頼関係を築いていければと思う。」、あゆみの会の吉川貴章副理事長は「安全な食料を生産する現場で、生産者として栽培に関して色々な取組を行っている。今回の公開確認会で学んだことを、組合員に喜んでいただける作物を作り活かしたいと思う。」とそれぞれ挨拶がありました。

### ■産地の取組報告

はじめに、有限会社アグリクリエイト斉藤公雄会長よりお話をいただきました。アグリクリエイトは、あゆみの会が母体となってできた農産物の流通や資材販売などを担う事業会社です。斉藤会長からは、あゆみの会の成り立ちや基本理念、有機栽培の苦労などが紹介されました。有機栽培を始めたころのチンゲン菜は形が揃わず、味も悪く大変苦労しましたが、10年以上かけてようやく安定して生産ができるようになったことが紹介されました。

次にあゆみの会事務局丸山訓氏から、会の概要や現在力を入れている取り組みが紹介されました。あゆみの会は 1989 年、有機栽培を目指す農家を中心となって結成されました。千葉県・茨城県を中心に会員数は 111 名となっています。主な農産物は今回の監査対象品目であるチンゲン菜の他、人参、里芋、ごぼう、大根、大葉、ほうれん草、小松菜、白菜、キャベツ、ミニトマト等様々な品目を栽培しています。

2005 年よりパルシステムとの取引が始まり、2011 年からはチンゲン菜の周年出荷が始まりました。

現在は食品リサイクルシステムという、食品残渣を循環させ、持続可能な社会を育てていくという取り組みに力を注いでいるとのことでした。

### ■「チンゲン菜」の圃場視察

昼食の後、生産者の横瀬伊千男氏の圃場を視察しました。圃場では、土づくりや苗の定植の仕方から散水の方法、収穫の仕方までの説明がありました。特に土づくりには力を入れており、畑の健康診断(土壌分析)を定期的に行ない、養分のバランスが崩れていないか確認をしているとのことでした。

その後、関甚一氏の作業場を視察しました。パック詰めの様子をはじめ、種まきの実演を見ることができました。チンゲン菜の生産者の方は、午前中にチンゲン菜の収穫をし、午後からパック詰め作業をおこなっていると説明していただきました。特に種まきの実演は、参加者の多くが初めて見たということもあり、あまりにも早い作業に感動した、との声が多く寄せられました。

### ■栽培技術の継承を望む

圃場から戻り、監査人からの所見報告がありました。監査人からは「組織のすばらしい理念であり、日本の農業を支えていると感じました。」「周辺の農家との連携を含め、品質向上の取り組みをおこなっていると感じました。」「土づくりをしっかりとしており、土の分析をし、必要、不必要の見極めをしています。」「土の管理をしているため、連作障害がないことを理解しました。」と理念と栽培技術、特に土づくりに感心した所見が述べられました。「農薬の使用は、空き容器の処理も含めて管理できていました。ハウス内の消毒について、近隣との連携も取れていると感じました。」「出荷品目は温度管理も行っています。温度管理にコストがかかるが、人出を省いてコスト管理も行っています。」「発注書、納品書など、書類について管理されていることを確認しました。」と生産や品質向上などの工夫や努力についての所見もありました。

また、「どの産地にも後継者問題があります。知識を残していかないとつらいと思います。後継者に技術をしっかりと受け継いでもらいたいです。」とこの栽培技術の継承を望む所見もありました。

最後に、株式会社ジーピーエス工藤友明事業本部長は「有機認証について、有機の第3者認証では足りない部分が多いです。参加型有機認証制度(PGS)というものがあり、世界的ネットワークで新たな認定として広がってきました。パルシステムの公開確認会のような取組みが認められてきました。名前の由来について有機栽培とあるが、それに近い理念で行っています。先見の明があったと思います。食で健康をとというのがこれから必要です。職人集団をつないでいくということは、関東の産地全体で取り組んでほしい内容です。事務局の担い手も大切にすれば職人集団が繋がっていくのではと思います。」とまとめました。

産地受け止めとして、事務局の丸山訓氏からは「初めての公開確認会は大変でした。送って確認した書類はあるが、元のデータがないケースが度々ありました。皆で確認するためには、目で見えるデータが必要であると感じました。各地域にいる生産者をまとめていくことが今後の課題です。後継者については、いる地域とない地域があります。野菜の栽培管理の技術などの継承と事務局の体制も含めて考えていかなければならないと思います。」と述べました。最後にパルシステム茨城鈴木裕子理事から「この公開確認会の開催に協力いただいたあゆみの会について、今日確認したことを他の組合員やご家族の方に伝えて下さい。食の安全を確認するために公開確認会を行なっています。この生産者と消費者の繋がりを今後も大切にしていきたいと思います。」と閉会の挨拶があり、公開確認会は終了しました。



▲パルシステム茨城 小泉智恵子理事長



▲有機栽培あゆみの会の皆様



▲産地プレゼンテーションの様子



▲作業場視察の様子



▲圃場(ハウス)視察の様子



▲土壌検査機材

---

---

## 有機栽培あゆみの会 公開確認会所見のまとめ

### 1、産地の理念・事業内容について

- ・今では一般的になった「有機農法」という言葉を 時代を先取りして1989年設立時に（失敗を恐れず勇気

をもって有機に挑む姿勢を表現すべく) 有機農法へのこだわりとして掲げたことは興味深い。

- ・産地組織は「有機農法あゆみの会及び生態農法実践研究会運営規則」をもとに運営されている。
- ・基本理念の取り組みが評価され環境保全型農業推進コンクールで奨励賞を受賞している。
- ・会員規則第6条④栽培基準内容の文書化が望まれる

## 2、産地の組織や意思決定について

- ・あゆみの会における栽培管理上の責任を記載した覚書の日付けの確認、捺印が必要である。
- ・組織図によって役割と責任関係について確認した。
- ・生産者は名簿によって管理され、圃場も登録されていることを確認した。

## 3、産地の栽培基準について

- ・作付計画書をジーピーエスのサイト「F-net」で内容を確認した。
- ・産地の栽培基準は、半期に一度、事務局と生産者のグループで協議し確認する。
- ・産地基準等で新たな対応を要する場合は、チンゲン菜生産者3人と事務局との協議によって決める。その場合は、「FAMIC (ファミック)」(独立行政法人農林水産消費安全技術センター)のサイトを参照することを聞き取りによって確認した。
- ・栽培基準は文書化されておらず経験に基づいているので、文書化が望ましい。

## 4、栽培の実践について

- ・土壌分析は半期に一度。
- ・1圃場で1年6~7回チンゲン菜を収穫する。
- ・分析結果をもとに施肥設計をする。
- ・土壌消毒は太陽熱を利用する。
- ・管理しやすいのでハウス栽培。マルチ張りにより除草の手間を省く。栽培時期の温度に合わせ、夏場は株の間隔を広くとったマルチを使用。栽培管理はカード記入し、事務局が管理する。
- ・農薬の保管庫は包装作業場の一角に鍵がかけられた状態でおかれていた。
- ・保冷庫は出荷用コンテナが50個以上は入れられる容量であることを出荷場で確認した。

## 5、表示・出荷について

- ・発注書の流れの最後はグループ代表者が配分して電話する。毎年グループ代表者は3人の間で交代制。
- ・視察した生産者はチンゲン菜のみを栽培し、すべてエコ・チャレンジ基準で栽培されている。
- ・包装作業場では、ジーピーエスからの注文は通常品とエコ・チャレンジ基準の2種類あるが、生産者カードで区別している。
- ・出荷場は清潔で、整理整頓されていることを確認した。

## 6、その他

- ・交流会、職員研修、産直講座に取り組みがされている。開かれた産地を目指す意欲をみた。今後も取り組んでほしい。
- ・農薬散布はハウスの出入り口を閉めて行ない、飛散を防いでいる。周辺圃場生産者も気を使ってくれている。
- ・土壌分析の結果、現在の状況を確認し効果的に肥料を使用。連作障害が無いことを確認した。

### 監査人名簿

1	パルシステム茨城	組合員	関根 裕子
2	パルシステム茨城	組合員	藤田 隆三
3	パルシステム茨城	組合員	谷中 美津江
4	パルシステム茨城	理事	石井 恵美子
5	パルシステム生産者・消費者協議会	野菜部会	毛利 嘉宏
6	株式会社ジーピーエス	事業本部長	工藤 友明

---

---

※ 監査シート・レポートの自由記載欄に記入いただいた内容を下記に掲載しました。

\* 編集の都合で、加筆・修正している箇所があります。

- ・有機で土づくりをしている生産者の皆さんにとって、丹精込めた耕作地をやたら他人に譲るなどという考えに至らないのは理解できます。しかし、実際は現場で作業するのは生産者のご夫婦とラオスから来られた農業研修生2名です。作業の担当には多少の違いがありますが、土日なく延々と種まき・灌水・収穫・出荷等が続けておられます。生協には週5日、その他にJA、らでいっしゅぼーや等にも出荷しています。まず休日とはとらないと辛いと思います。
- ・現時点では後継者がいませんが、栽培技術が引き継がれる方法はないのでしょうか？設備や技術が廃れるのはもったいないことだと思います。
- ・本来ならば、収穫・出荷の作業で忙しい中を、私たちのために時間を割いていただき、本当にありがとうございました。土づくりからこだわって、いろいろ苦勞されたことや今までの生産過程の話を聞かせていただき、みなさんにますます頑張ってください、そのためにもこれからどんどん応援していきたいと思いました。今年のように暑くて乾燥した日が続くこともあれば、雨が多くて作物が病気になる年もあるかと思います。みなさんが取り組まれてきた「健全な土づくり」でなんとか生産が安定してくれるよう心から祈っています。そしてこれからも元気でおいしいチンゲン菜を作って下さい。これからパルシステムでチンゲン菜を注文するときは、みなさんの顔が真っ先に浮かぶと思います。
- ・今後も安心・安全なおいしい野菜の供給をお願いいたします。交流として、センターでのお料理講習会等開催をお願いしたいです。気温等、お天気に左右されるでしょうが、おいしいお野菜作りのため今後の努力に期待します。頑張ってください。
- ・毎回注文しています。生産者の方より、白い部分を漬物にすると美味しいと教えていただきましたので、作ってみようと思いました。
- ・パルシステムの厳しい基準での栽培は大変でしょうが頑張ってください。いつもチンゲン菜おいしくいただいています。連作でも障害がないということはすばらしいと思いました。